
東からの来訪者

時次治

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

東からの来訪者

【Nコード】

N0912V

【作者名】

時次治

【あらすじ】

東の大国「大和」から来た少年レイは、欧州の国ブリタニアで亡命中だった少女たちと出会う。戦争で国を失った彼女たちを助けることを決意したレイは……。安定の主人公最強ものになる予定。魔法は一切出てきません。ゆっくりまったりと書いていきます。ちよつとした挨拶程度でもいいので、感想をいただけると嬉しく思います。

※たぶん残酷描写あり

0 老人の死

かつて武神と呼ばれた迅という老人が亡くなってから、もう二年になる。山奥で隠居生活を送っていたために、その事実を知るものは今のところ一人しかない。そして、その一人というのもまた、誰からも知られることが無かった存在であった。

その老人には幼い弟子がいたことは恐らくだれも知らない事実だ。その老人によって付けられた彼の名は零^{レイ}である。幼いころから迅と共に修行を重ね、戦闘技術はともかく、十二歳になるころには迅にも引けを取らないくらいには強くなっていた。迅老人の体力がもはや尽きかけていたというのも原因のひとつだが、それ以上にレイには輝くような才能があった。頭が良く、器用で、素直な子どもであると、当時の彼を見ていた人であれば十人の内九人はそう評価するはずだ。

迅の教育方法も良かったようで、レイは計算から武器の作り方で多くの知識も身につけていた。そして知識が多くなっていくにつれて、新たな知識と経験をも身につけていったのである。

その時が来たのは、レイのが十四歳になる少し前の事だった。

病に伏せた迅老人は、レイに一通の手紙と彼が若い時に使っていた刀を託し、遺言を残した。

「遙か西の国にいるはずの古い友人にその手紙を届けて欲しい」

レイにとって、迅の言葉は絶対だ。迅が月に行けなどという無茶を要求しても、彼はそれを実行に移そうとするだろう。それくらいに迅に対して恩を感じていたし、信頼してもいた。

「はい。必ず」

レイは小さく頷く。それを見て、迅はにっこりと微笑んだ。迅がこれほど弱々しく見えたのはレイにとって初めてだった。

「これから、様々な困難や誘惑に出会うじやろう。そういう時は自分を強く持つことじや。」

困った人がいれば手を差し伸べ、信頼を得よ。困ったことがあれば信頼できる人間に頼ることじゃ。人は他の人無しには生きられぬ。そのことを肝に命じておきなさい」

再びレイは頷く。言葉はもう必要無かった。

迅が亡くなったのはそれから三日後のことである。

0 老人の死（後書き）

初投稿です。よろしくお願いします。

1-1 ブリタニアにて

ブリタニア王国連合。

ブリタニア半島に存在する、四つの王家が統治する連合国家である。学術においては欧州で最も優れているとされ、ロンドンにある王立図書館の蔵書数は世界一だ。地理的にもやや特殊な国であり、干潮時は大陸と陸続きではあるが、満潮時には大陸との陸路が遮断される（とは言っても、泳いで渡ろうと思えば渡れる距離だ）。

レイは首都ロンドンから東に百キロほど離れた街に来ていた。

鋭い鷹のような目付きをしているがその顔立ちはまだまだ未成熟のものだ。彼は二ヶ月前に数えて十八になったばかりであった。十月生まれなので、満年齢だと十六歳と五ヶ月ということになる。身長も大和の国ではやや高い方ではあったが、ここに来ては周りの人間より一回りも二回りも小さい。

しかし、黒の髪と黒の目、黄色人種独特の赤みを帯びた肌は、北欧系の民族が多い地域の中にあってはかなり目立っていた。シルクロードから来る華国の人間もモスクワか、せいぜいビザンチウム（イスタンブールのこと）にまでしか足を運ばないので、この場所ではレイと同じ人種の人間は一人もいなかった。

「困ったな……」

レイは自分の手の中にある硬貨を見つめていた。手持ちのお金が銅貨が六枚しかない。最初は大和から持ってきた品物を売って耐え忍んでいたが、それも限界に近づいている。もっとも、山に籠って暮らしていたレイの金銭感覚はゼロに近かったので、かなりボツタくられていたということに気づいていなかったというのも原因の一端である。

売れそうなものと言えば、自分で作った短刀と木製の灯籠くらいだけになっていた（迅から託された刀は当然売るつもりはなかった）

。夜になれば持ち運びもできる灯籠は非常に便利だったので、売るのは惜しかったのだが仕方がない。まずは短刀を売って、それでも足りないようであれば灯籠を売ろうと考えた。レイは意を決して、賑やかな市場に顔を出した。

「すまないが、この短刀を買い取ってはもらえないだろうか？」

「ふむ、これはなかなか立派な品だな」

刃物屋の老人が唸った。レイの作る武器はどれも一級品だ。材料と設備さえあれば、一流の刀鍛冶にも引けを取らないくらい作品を作ることができる。しかしながら、ブリタニアにおいて設備はもちろん、材料が手に入らなかったのも、レイは刀を作ることを完全に諦めていた。

ちなみに、ブリタニアに来るにあたって短刀七本と日本刀三本を持って来ていたが、既に短刀は三本、日本刀は二本になっていて、これ以上売りに出すと森や山、川などでの食料調達に支障が出そうなので、本来は自重しなければならなかった。ある意味で、刀を売るというのは自分の命を削る行為なのだ。

「それは良かったです」

レイは無表情のままだ。

「ドネーク銀貨三枚でどうですか？」

短刀から目を離して、刃物屋の老人が問う。今までのことを考えると決して悪くはない金額だが、もう少しレイは粘ってみることにした。

「四枚にはなりませんか？」

しかし、老人は首を横に振った。

「さすがに厳しいものがありますなあ。これは確かに立派な品ではありますが、短いものは需要が高くないのじゃ。どうしてもダメだったら他を当たってください」

レイは少し考えて、自分には選択肢がないことに気がついた。この近くに刃物屋は他にないし、お金を手に入れることは急務なのだ。「わかりました。三枚で構いません」

老人は銀貨三枚と銅貨五枚を取り出して、レイの手のひらの上に置いた。

「銅貨五枚はサービスじゃ。どうやらお金に困っているようじゃから」

フォツフォツフォツと、高笑いする老人にお礼を言って店を出た。

1-1 プリタニアにて（後書き）

2011年7月26日 レイの年齢に関して補足追加

1-2 姉妹

市場は相変わらず人が多い場所だった。首都からはかなり離れているのだが、大陸から入ってくる人も多くいるのだろう。そしてまた、首都からも大陸から輸入品を求めて人がやって来るのだ。客寄せの声にも気合が入っている。

そんな賑やかな通りを歩いていると、急に横から飛び出てきた人にぶつかった。勢い良く飛び出してきたので、スリか何かだと思っただけで一瞬身構えた。が、杞憂だったらしい。

茶色のフードをかぶっていて顔は見えなかったが、敵意あるいは害意といったものは無いように感じた。その人物はよく見ると二人組で、そのうちの一人はレイよりちよつと低いくらいだったが、もう一人の方は随分と小さく、背丈がレイの胸あたりまでしかなかった。

「すまない。急いでいたのだな」

背丈の高い方が謝罪の言葉を口にした。やや低めの声だが、まだ若い女のものだ。二人ともかなり息を切らしていて、特に小さい方は今にも倒れそうな気配だった。

「いや、気にしていない。それより手を貸そうか？」

困っている人を助けろという迅の言葉を思いだし、そう告げた。さすがに、レイが見ても二人は困っているように見えたのだ。

「いや、必要ない。私たちの問題だ」

毅然とした態度で女は告げる。あまり他人には割り込んで欲しくない問題らしい。

「しかし……」

レイは小さい方に目を向けた。おそらく長い間走っていたのだろう。息の仕方が尋常ではない。このままだと過呼吸を起こしそうな勢いだ。その辛さは彼が身を持って味わったことがあるので、とても心配になった。

「いや、いいんだ。時間を取らせて済まなかった」

彼女はそう念を押すと、二人とも人ごみの中に消えていった。

しばらく二人が消えた方向を見ていたレイは、ため息をひとつ漏らし頭を掻いた。少しばかり気になったので追いかけてようとも思ってたが、他人の事情を詮索するのは野暮である気もするので躊躇われたのであった。

そうして迷っているのが良くなかったのだろう。またしても人がものすごい勢いでぶつかってきた。今度はレイより一フィート以上も背の高い大男だったので、体重が軽いレイはそのまま吹っ飛ばされた。

「おっと、これは失礼」

大男はそう言うのと、急いで走り去っていく。しかし、レイの意識はそんなところには無かった。

「あ……」

チャリンチャリンと愉快な（レイにとっては不愉快な）音を鳴らしながら、巾着袋から硬貨が飛び出した。刹那、跳ねる硬貨を捕まえようと通行人が群がる。銀貨はここにおいてはなかなか価値が高いのだ。数秒後には地面に落ちた硬貨は一枚もなくなった。

「銅貨四枚か」

思わずため息が漏れる。

巾着袋に残っていたのは銅貨が僅か四枚。その後老紳士が一枚拾ってきてくれたが、結局手持ち金は銅貨五枚になっていた。短刀を売る前と後で、銅貨マイナス一枚である。

我に返ったレイは、すぐに大男を見つけ出す。距離はだいぶ離れていたが、周りの人間よりも頭ひとつ分大きかったので、すぐに見つけ出せたのだ。

「さて、返して貰おうか」

目には目を、歯には歯を。あの男の所為ででお金が無くなったのだから、あの男から取り返すのが筋である。と、レイは割と真剣に

考えていた。



追手が五人から六人に増えた。リツカ・ライティネンは直感的にそう感じた。少し前に東洋人の青年にぶつかってしまったのがタイムロスとなったのか、あるいは裏路地に逃げ込んだのがいけなかったのか。

人目のつく所だと滅多なことは出来ないだろうとも考えたが、奴らはそんなことは気にしないだろう。妹のマチルダを人質に取られたらこっちの負けだ。

しかし、そのマチルダを掴んでいた右手が急に重くなった。

「お、お姉ちゃん」

後ろを振り返ると、マチルダは地面に座りこんで肩で息をしていた。

リツカは自分の下唇を噛んだ。その力が強すぎたのか、口の中に鉄の味が広がっていく。マチルダは壁に寄りかかり、呼吸を荒くしていた。彼女はもう走ることができないというのは誰の目から見ても明らかだった。

「お姉ちゃん、ごめんね」

弱々しく、マチルダが微笑みかけてくる。そして同時に背後からの足音。どうやら、首都ロンドンに辿り着けないまま、逃走劇は終わりを告げたようだった。

「私の負けか」

リツカは腰に差していた剣を抜いた。護身用に持ってきたレイピアである。ここで剣を抜いて戦ったところで勝ち目は無いことは分かっていたし、逃げることも叶わない。それでも、妹を前にして情けない姿は見せられなかった。

「不思議だな。マチルダ」

マチルダはそれには答えず、目だけをリツカに向けた。

「お前がいるだけで、私はこんなにも勇気が湧いてくる。死への恐怖もない」

「だめ……、お姉ちゃん」

リツカは何も言わずに微笑むと、マチルダの頭に手を置いた。

そして、足音がした方に体を向ける。そこには体躯の良い男が三人立っていた。残り三人の追手は逃げ道を塞ぐ為に待機しているのだろう。

「大人しくしていれば命までは取らない。一緒に来て貰おうか」

右側に立っていた男が言った。

「断る」

リツカはきっぱりと言い放った。

「命があったとしても一生幽閉されるか奴隷になるかのどちらかだ。私には貴族の誇りがある。そんな人生を送る気はない」

リツカは剣の柄を握りしめた。足が震えていることに気づいた自分に思わず笑ってしまう。妹の前では立派な姉でいようと思っていたのに、守るところか立派でいることさえできない。結局、怖いものは怖いのだ。それを隠すこともできない自分が情けない。

「止まれ……止まれ……」

震えが止まった。

剣を構え、目を開き、三人の男を睨みつける。

幼いころから剣を鍛えてきたリツカは、自分の腕には相当な自信があった。一対一なら相手がプロの殺し屋だったとしても負ける事はない。そう自分で思えるくらいには必死で努力してきたし、経験を積んできた。

しかし、今対峙しているのはプロが三人だ。さらにその後三人控えているだろう。勝ち目は万に一つもない。

「お姉ちゃん……」

それでも、妹の前では弱いところなど見せられないのだ。

1-3 傍観

少女はただ祈っていた。

奇跡が起きてくれることを、祈っていた。

そんなことが起きることは到底考えられなかった。人通りが少ないこの道で、誰かが助けに来てくれるなんてことはない。そう分かっているながらも、祈らずにはいられなかったのだ。

——助けて

頭を撫でられた時の姉の手が震えていた。右手に持っていた剣も震えていた。ただの強がりだっていうことは、分かっていた。

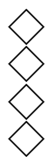
だからこそ、助けてあげたい。そうしたいのに、そう思うのに、祈ることしかできないのが悔しかった。

——誰か助けて

いつのまにか、マチルダは自分が叫んでいることに気づいた。

「お姉ちゃんを助けて！」

少女は祈った。この声が誰かに届きますように……。



「何やってるんだ？ そんなところで」

そんな声がリツカの前方、正確に言えば男達を挟んで向こう側から聞こえた。

最悪だ。リツカは反射的にそう思った。ついさっき、ぶつかってしまった黒髪の少年がそこに立っていた。リツカを感じた六人目の気配は恐らく彼のものだ。結果として、追手は五人に戻ったが、こ

れから出る犠牲者が一人増えてしまうことになる。

「何でもない。早く立ち去れ」

一人の大男が言う。もし素直に従えば無駄な犠牲はない。リツカはそう思って安心したが、その安心は五秒も持たなかった。彼はその場を動こうとしないどころか、挑発的な態度を取り始めたのだ。

「さっきこいつに跳ね飛ばされたんだ」彼は三人の真ん中にいた男を指さしながらそう言った。「それで財布落としたから取り返しに来た。それに……」

彼はそこで一旦言葉を区切った。そして、リツカ達の方に首を向ける。一瞬、リツカはビクリとして動きを止めた。

「それに？」

「助けてと言ったので、無視はできないなあ……と」

表情自体に全く変化は無かったのだが、その口調は明らかに相手を馬鹿にしている。リツカ達を囲んでいた大男もそう受け取ったらしい。だからと言ってそのまま我を忘れて激昂するわけではなく、目の前にいる子どもを諭すように対応するあたりは流石である。

「少年。これをやるからあっちに行ってなさい」

大男はポケットから金貨を取り出すと、それをレイに投げつける。それを掴んだレイはしばらく自分の手の中の金貨を眺めていたが、それを指で弾いた。綺麗な直線軌道を描き、その金貨は大男の眉間に正確に突き刺さった。

「九枚だ。たった一枚で足りると思うな」

ドネーク銀貨なら二十枚分にもなる金貨であるが、レイはそのような大金を持ったことがない。金貨がどのくらいの価値を持つのかを全く知らなかった。後になって考えると、それが生死の境目となったのだろう。

「あの馬鹿……殺されるぞ」

リツカは思わず歯噛みした。なんとかしなければならぬと思いつつ、マチルダが後ろにいたので放っておく訳にもいかない。この隙に逃げようとも考えたが、逃走ルートを塞ぐ二人がどこかにいる

はずだ。迂闊に動くことは到底無理だ。

大男の一人が剣を抜いた。レイピアとは違い、相手を斬る為の武器だ。

リツカは止めようとするものの、二人の男に行く手を阻まれる。更に後ろからの足音も聞こえてくる。待機していた二人が物音を聞きつけて来たのだらう。

フードを脱ぎ捨て、その影に隠れて右に回りこむ。そのまま一人目に突きを入れようとしたが、剣で弾かれた。しかし、時間稼ぎには十分だ。その間に、体力を少し回復していたマチルダがリツカの後ろを走っていく。ここを上手く抜ければまた表通りに逃げる事ができるかもしれない。

「ッ！」

手が痺れる。

だが、その切先はリツカに届かなかった。

「がああああつ！」

リツカが顔をあげると、すぐ眼の前に少年の顔があった。その手に握られた短刀は根元まで男の腕に刺さっており、そこから血が滴り落ちてゐる。レイの殺氣に当てられたリツカはぞくりと背筋を震わせた。

マチルダの叫び声でリッカは我に返る。後ろから――リッカから見れば前方だが、男がレイに斬りかかって来るのが見えた。

その状況をリッカが把握する前に、レイは動き出していた。

リッカの方を向いたまま、レイはバックステップでその男の懷に潜り込む。彼の背中が男の胴体に触れると同時に、鋭く振り上げられた右手は男の顎に正確に命中していた。

骨が碎ける音と共に仰向けに倒れ、そのまま動かなくなった。

「すごい」

もはや感嘆の言葉しか出てこなかった。相手の動きを正確に把握していないとあそこまでの動きなど出来る訳がない。まるで後ろに目が付いているかのようだ。

そしてほとんど間を空けずに、残り二人の追手がレイに襲いかかる。レイは背中から三フィート以上はある刀を抜いた。建物の影になっっている薄暗い路地でも鈍く光るそれは、芸術品のような美しさだった。

しかし、彼の動きはそれに輪をかけて芸術的だった。

相手の動きを完全に見切り、余裕を持って躲していく。剣の峰で相手の剣を受け流し、一步下がって間合いを取る。そして、攻撃が切れた一瞬の隙を突いて相手のみぞおちに拳を打ち込んだ。まず一人目が倒れた。

さらに、もう一方の攻撃も簡単にいなしていく。次に刀を振ったと思った時には、胴体から腕が切り離されていた。最後の一突きが喉に刺さる。その男は一切声を上げぬままに絶命した。

風を斬る音がして、背中 of 鞆に刀が収まっていく。刀に付着していた血痕が同心円状に飛び散り、その一つがリッカの顔に張り付いた。

完勝だった。五人を相手に死者二名、気絶者二名。右手を刺された男は既にこの場から逃げ出していた。

1-3 傍観（後書き）

サブタイをどうするか迷った。

1-4 感謝と想いと

「立てるか？」

しばらく放心状態だったリッカは、自分が地面に座り込んでいることに今更ながら気がついた。たぶん、あまりにも強い殺気を浴びせられ、そのまま腰が抜けたのだろう。気恥ずかしくなったリッカは頬を赤らめた。

「ああ、大丈夫だ」

顔に付いた血を拭う。衣服に付いた埃を軽く落としてから、ようやく気持ちに余裕が出てきた。マチルダが腕抱きついてきたので、リッカはその頭を優しく撫でてあげた。

「助けてくれたことに感謝する。私はリッカ・ライティネン。こっちは妹のマチルダ」

「俺は零^{レイ}。大和から来た」

リッカが差し出してきた右手を軽く握る。この時に初めて、レイは二人の顔を見た。今まで逃亡生活を送ってきたせいだろう。二人とも、お世辞にも清潔とは言いがたい姿をしていた。見る人が見れば浮浪者にしか見えないだろう。

リッカは長く伸びた金髪を乱雑に縛っているだけで完全に硬くなってしまうているし、肌もあちこち黒ずんでいる。栄養も十分にとれてないらしく、腕も細い。ただ、緑色の瞳だけが生氣に溢れていた。

それに比べると、妹のマチルダの方は幾分かはまともだった。ところどころ汚れてはいたが、まっすぐに伸びた髪は手入れがある程度行き届いていることを示している。たぶん、リッカが何につけても妹を優先した結果なのだろう。しかしながら、レイはそれを知ることには無かったし、知ったとしても彼にとってはどうでもいいことだ。

「さて、何かお礼をしたいところだが、まずこの場を離れなければ

いけないな」

「どうして？」

「誰かに見られると面倒だ。とりあえず、大通りの方に行こう。それと、金も奪う必要があるな」

リツカは男たちの上着を剥がしていき、今の三人には十分すぎる金額を手に入れた。そして最後に地面に落ちていた金貨を拾う。

「これはお金なのか？」

レイはリツカの手のひらに乗った金貨をまじまじと見つめた。表面には女性の肖像とそれを取り囲むように文字が並んでいる。

「これは金貨だよ。金貨は二種類あって、ローマから流れてくるダカット金貨とペルシアから来るナール金貨があるのだが、これはダカットだな。ドネーク銀貨二十枚分の価値がある」

「に、二十枚だって？」

レイは素直に驚いた。銀貨一枚で一日暮らすには十分なこの国では金貨など滅多に見ることができない。確かに驚くのは無理もないことだろう。

「もしかして、君はこの国の貨幣価値を知らないのではないか？」
リツカの指摘に何も答えないことが、この問いに対する答えとなった。



マチルダは浴場で物思いに耽っていた。

助けてと祈ったら、本当に助けに来てくれた。

黒い髪に黒い眼をもつ異国の少年。

大勢の敵にも怯まず、わたし達を見捨てることもなく、命をかけて戦ってくれた。

「わたしの王子様……」

「マチルダ？」

背中を流してくれていたリツカが、マチルダの独り言に反応する。

どうやら何を言ったかまでは聞き取れなかったらしい。

「ううん。何でもないよ」

マチルダは首を横に振る。

何を浮かれているんだろう。そう思って、マチルダは心の中でため息をついた。

私なんかよりも姉の方が彼に相応しいではないか。

年も近いし、気も合うみたいで、さっきも随分と話し込んでいた。でも、わたしは彼の顔を見ただけで……彼の顔も見れなくて、話すことなんて到底できなかった。ずっと、姉の後ろで隠れていることしかできなかった。

「お姉ちゃん、とても綺麗だもん」

凛々しくて格好良い、そして女性的な美しさも持っている姉は、何もかもがわたしとは対照的だ。性格だって姉は社交的でわたしは人見知りをするし、背も高く、胸も大きくなってきた姉の姿は妹のわたしでも見惚れてしまうくらいに美しいのだ。対するわたしは、（ちょっと悔しいけれど）まだまだ子どもだ。十歳になったばかりで姉とは五歳も離れているので、そのくらいは当然だろうと言われるかもしれないけれど。きっと、五年後になっても、わたしは姉のようにはなれないだろうな、そう思ってしまう。

そんな姉に近づきたくて、いつも姉の側で過ごしてきた。姉と一緒にのことをしてきた。姉と一緒にのものを好きになった。

きっと、好きな人も一緒になるのだろう。

いつも姉から守ってもらうばかりで、譲ってもらえるばかりで、姉はいつもいつもわたしの為に我慢してきたはずなんだ。だから、今度はわたしが姉にお返しをしなければいけない。

きっと、お姉ちゃんも彼のことを好きなのだから。

「お姉ちゃん」

でも……

「今度はわたしが、お姉ちゃんの背中を流してあげる」

お姉ちゃんに負けたくないという気持ちもどこかにあって……

1-4 感謝と想いと（後書き）

今更思うけど、前半を前の話に入れるべきでした。

言い訳をすると、後半部分は元々入れる予定が無かったっていうのがあります。

流れ的にマチルダが空気になっていたので、入れる必要がありそう
だということで、急遽入れました。

あとで編集しようかな……

1-5 非常識

二人が浴場に行っている間、レイはある宿の部屋にいた。

一緒に入ろうかと大真面目に提案した時は、リツカはこれ以上は難しいというくらいに顔を真っ赤にして、女が男に肌を見せるといふのはどれだけ重要な意味を持つかということをレイに叩き込んでいた。

（人間）の男と女の区別は最近分かってきていたレイだったが（迅以外の人間を知らなかったので、最近になるまで区別がついていなかった）、それが社会的にどういう意味を持つかということが分かっていなかったのである。

それは置いておくとしても、ローマの公衆浴場と違って男女混浴では無かったし、マチルダもリツカも大変恥ずかしがっていたので、特に強要するものでも無かった提案は、残念ながら（？）破棄された。

「話相手がいないっていうのはつまらないものだな」

レイは刀の手入れをしていた。

先ほど人を切った時、切れ味が良くないことに気がついたのだ。それでも、リツカがあればほど鋭い切れ味の剣は初めて見たと言っていたあたり、西洋では製鉄技術、あるいは武器の製造技術が発達していないらしい。

研ぎ終わった刀は月明かりを受けて、幻想的な光沢を放っていた。それを美しいと感じる芸術の心はレイも持っていたので、角度を変えて最も綺麗に見えるポイントを探そうとしていたが、その作業は扉から入ってきたリツカ達によって中断を余儀なくされた。

「いつ見ても素晴らしい剣だな。大和ではみんなそれを使っているのか？」

「ああ」

実際に大和で刀が使われた現場を見たことが無かったが、迅から

聞いた話だと、大和の武士が常時装備しているものらしい。武士の魂として、片時も手放すことはないのだということも聞いていた。

「お姉ちゃん」

マチルダがリツカの袖を軽く引つ張る。その動作は小動物的な可愛さに溢れていて、この場に他の人がいれば、悶え死ぬ人が続出しただろう。

確かに、リツカにとってもその可愛さにグッとくるものがあったのだが、そのような場合ではないということも同時に思い出した。

「いや、それよりも……」

レイはリツカの方を向いた。何の感情も込められていないその目を見て、彼女は薄気味悪さを感じたが、次の言葉を何とか口にする。

「なぜ、同じ部屋を取ったのだ？」

「はあ？」

レイの口から漏れたのは随分と間の抜けた音だった。

「だから何故同じ部屋を取ったのだと聞いている」

イライラしているのを隠そうともせずにリツカは言葉を続けた。

「そりゃ、お金が勿体無いじゃないか」

レイは、リツカが何を問題にしているのかがわからなかった。異性が裸体を晒すのは将来を誓い合った仲の者だけだということは当のリツカから聞いたのだが、同じ部屋に泊まることに何の意味があるのかはわからない。

またしても、自分の知らない「常識」というものが存在しているのだろうか。

「そ、それはそうだが……」

しかし、リツカはしきりにベッドの方を見ていた。

たしか、部屋を取った時は二人用の部屋だと言われていた。そのことを気にしているのかもしれない。

「もしかして、二人部屋だっていうことを気にしていたのか？」

でも、それは仕方がないだろう。金も無駄遣いできないし、三人部屋が無かったんだ」「そうじゃない……」

リツカは本格的に頭を抱えなくなった。この男の頭の中身がわからない。

いくら異国の人間であったとしても、ここまで「性」というものにフリーダムになれるものだろうか。

「部屋にベッドがひとつしかないことが問題なんだ」

「その何処が問題なんだ？ ベッドは大きいから三人でも寝られるだろう」

リツカはついに頭を抱えた。マチルダは「大丈夫？」と声をかけてくれているが、これからわざわざ説明しなければならないことを考えると、大丈夫だとはとても言い切れなかった。

「つまりだな、このベッドはダブルベッドと言ってだな……」

リツカが説明を終える頃には、リツカもマチルダも顔を真っ赤に染めて、羞恥に耐えていた。説明を受けたレイだけは、そんなものなのかと頭を捻っている。

「とりあえず、今日のところはこれで寝よう」

「貴様、今の話を聞いていたのか？」

「おかしいことを聞くな？ 当たり前じゃないか」

全く、自分の発言に疑問を持っていない顔だったので、リツカはつい怒鳴った。

「おかしいのは貴様の頭の中だ！」

どうして俺の頭の中が分かるのだろう、と呟いていたレイに一瞥もくれずにリツカはベッドの中に入った。そして、マチルダもそれに続く。レイもそれに続こうとしたがリツカに蹴り出された。

「貴様は床で寝てろ」

レイが命の恩人であるということは忘れていなかったが、女性として、そこまでの行為を許す気はなかった。元々レイにそんな気が無かったというのは、この際置いておくとしても、である。

小声で文句を言うレイが部屋を出ていくのを確認してから、リツ

カは小さくため息を漏らした。

自分が疲れているのが横になって初めて分かった。

（その半分くらいはアイツのせいだ！）

そう考えるとイライラが収まらなくなってきた。

（だいたい、アイツは常識というものが無いしデリカシーもないし人の気持ちを察することもできないしやたらと強かったし命を助けてくれたし戦っているアイツは格好良かったし顔も悪くないし……じゃない。

とにかく、何か頭にくる奴だ……ああ、イライラする……）

いつの間にかリツカの意識は深い闇の底へ沈んでいた。

1-6 早朝

朝、珍しく姉より早く目を覚ましたマチルダは、レイが部屋にいないことに気がついた。一瞬、焦りを覚えたが、レイの数少ない荷物部屋に残っているのを見て、ほっと胸を撫で下ろす。

「体が軽い……」

久々に熟睡できたことが大きかったのだろう。昨日はあれだけ走ったのに、足の疲れも無い。

この気持ちよさを姉にも伝えたかったのだが、当の姉はまだ気持ち良さそうに眠っていた。無理に起こす必要もない。

今まで安心して眠ることすら出来なかったリッカが幸せそうに眠っているのも、マチルダは不思議と嬉しくなった。

「お姉ちゃん、ずっと一人で頑張ってたもんね」

空は明るくなってきたばかりで、殆どの人は未だに寝ている時間だ。自然に目を覚ます方が良いと思ったマチルダは、リッカにシーツをかけ直すと寝巻姿のまま部屋を出た。

ぐにつ。

何か柔らかいものを踏んだ。そう感じた瞬間、マチルダの視界がグラリと傾いた。

床に叩きつけられ、右腕を取られる。そして、首の後ろを掴まれた。柔道などに使われる寝技、袈裟固め。しかし、すぐにそれは解かれた。

「マチルダか？」

「は、はい」

床にカーペットが敷いてあったせい、打ち傷などは無かったし、骨も折れてはいないようだった。

しかし、マチルダにとってそんな事は二の次だった。今、重要な

のは、目と鼻の先にレイの顔があるという事実である。

顔が爆発した。

という表現が一番適当であろう急激な速度で、顔が赤くなった。

「あ、ああ、あの……！」

「ん？」

「お、おトイレに行かせてください！」

そう言うが早いマチルダは走って階段を降りていった。

太陽がようやく顔を出し始めた頃、レイとマチルダは人通りの少ない市場で歩いていた。

殆どの店舗には「準備中」の札がかかっており、中では慌ただしく作業している様子が垣間見える。対照的に外の方は人が少なく、不気味なくらい静かだった。

話しをするような雰囲気でもなく、しばらく二人は無言のまま歩いていたが、それに耐えきれなくなったのか、あるいは独り言だったのか、マチルダが呟いた。

「何も聞かないんだね」

「何を？」

「わたし達のこと」

そう言ったきり、マチルダは歩みを止めた。

「だって、わたし達追われていたんだよ？ 命だって狙われてた」

レイは黙って続きを促す。

「わたし達を助けてくれたのは感謝してます。

でも、レイさんだってあの時に死んでいたかもしれないんだよ？
どうして、何も聞かずにいられるの？」

マチルダは顔を上げた。

レイは全く表情を崩していない。マチルダは自分の胸の中に怒りが沸き上がってくるのを感じた。その理由はマチルダ自身にも分かなかったが、もし、もう少し精神的に熟していたならば、好きな

人が自分に大して無関心でいるという悔しさからくるものだと感じたに違いない。

「どうして、わたし達の為に命を懸けて戦ってくれたの？」

「君たちの為じゃない」

レイは首を横に振った。マチルダが何を思っているのか、何を考えているのか、理解していない。理解する気もないのは明らかだった。

「奴らは俺に殺意を向けた。だから殺した」

レイは淡々と事実を述べた。人を殺すことに何の抵抗も感じていない。殺した事に対して後悔も、動揺もしていない。

マチルダは、この時初めてレイに対して恐怖を覚えた。

この人は何かがおかしい。

「……ねえ、あなたのことを教えて？」

マチルダは精一杯、表情を作ってそう言った。表情から人間の感情を読み取ることができないレイに対しては全く意味のない事ではあった。

「知って、どうするんだ？」

しかし、彼女がある種の決意を持って尋ねてきた事を、レイは直感的に理解した。

「別にどうもしないよ。ただ、知りたいだけ」

「わかった。それなら、君たちの事も教えて欲しい。

きつと、力になれると思う」

東から、太陽の光が差し込んでくる。市場も少しずつ人が増え始め、幾つかの店は既に営業を開始していた。

「でも、その前に……宿へ戻ろう」

レイは、手のひらをマチルダに差し出した。

武器を持つ手を相手に与える。それはつまり、レイが見せることのできる精一杯の信頼の証でもあった。

「うん」

マチルダは笑顔で差し出された手を受け取った。そして、二人は

並んで歩き出す。

しばらくして、宿から慌てて出てくるリツカを見て、マチルダは思わず笑ってしまった。宿から姿を消した妹を心配していたのだから。

マチルダが手を振ると、リツカの顔に安堵の笑みが広がった。その表情の変化があまりにも可笑しくて、マチルダはまた笑う。

二人の少女の笑いと共に、街は少しずつ活気に満ちていった。

1-6 早朝（後書き）

これで第一章は終わりです。

ここまで読んでくださった方、ありがとうございます。

これからよろしくお願いします。

あと、マチルダをお漏らしヒロインにするかどうか悩みましたが、みなさんの想像にお任せすることに（笑）

2-1 密約

バルト海を挟んでスエーチア王国の東に存在するニスカヴァーラ皇国は、かつてスカンジナビア半島と東欧州の殆どを支配していた歴史ある国だ。二百年ほど前の最盛期にはモンゴル帝国と国境を接するまでに至った、当時はローマ、ブリタニア、ゲルマニアと肩を並べる大国として覇権を握っていたのである。

しかし、それをピークに急激に国力を弱めていったニスカヴァーラ皇国は三十年ほど前にはバルト海の東側面に位置する小国でしかなかった。

その事に危機感を覚えた皇国は様々な国と手を組み、少くない犠牲と共に次第に国としての力を増していった。

ところが、二年ほど前に東欧州において戦争が始まる。

ここ最近で大きな力をつけたオストマルクが次々と周辺の小国を飲み込み、ついにはローマ帝国の一部、ニスカヴァーラ皇国全域を新たな領土とした。

「それが一年前のことよ」

マチルダはそう付け足した。

三人は、ロンドンに向かう商人達に頼んで、（有料ではあるが）貨物室に載せて貰っていた。

午前のうちに出発して、特に問題がなければ二日で到着する。急げば一日で行けるのだが、この商団は途中の小さい街にも立ち寄るつもりらしい。

「私とマチルダは元々はニスカヴァーラ皇国貴族であるライティネン家の娘であり、今は私が現ライティネン侯爵……ということになっている」

もっとも、国を失った今では殆ど意味を持たない称号だがな、と

リツカは自嘲するように言った。

「私達はゲルマニアを経由して、しばらくはガリア連邦にいる旧知の貴族の元に身を寄せていたんだ」

地図を広げてゲルマニアの位置を示すリツカ。測量技術が未発達であるこの時代のものにしては、かなり正確な地図だ。

>i30082—3867<

「ところが、だ。

戦争というのは飛び火するようで、半年ほど前からブリタニアとガリアの仲が急に険悪になった。というのも、ガリアの無茶な支援要請に対してブリタニア側がそれを拒絶したというのが発端らしい。

その辺の話は詳しく聞かされてはいないのだが、およそ鑑みるに戦争を起こす口実が欲しかったのだろう。ブリタニア内部にガリアに内通する者がいるらしく、時期を見てブリタニアを潰す気だったのは明らかだ」

「つまり……？」

「結論から言えば、オストマルクとガリアが裏でつながっている。そして、強国であるブリタニアを潰すことはガリア側にとっても、オストマルク側にとっても悪いことじゃない。ブリタニアはゲルマニア及びヒスパニアと軍事協定を結んでいるが、この三国に対して攻撃を仕掛けようとするガリアはの行動は普通なら《……》有り得ないことだ」

ガリアは三国に囲まれる形で存在している（正確に言えば、ローマ、ヘルベチアとも国境を接している）。どれか一つを攻撃すれば三方から攻撃を浴びて国が滅亡するのは確実だった。

今、ガリアが国の存在を保っていられるのは数十年前に交わされたゲルマニアとの停戦協定があるからだろう。ガリアとゲルマニアの間で交わされた協定を、ヘルベチア、フランデレン、オストマルク、ローマが監視するという状況になっている。どちらかが条約を

破れば、周辺諸国の殆どが敵に回ることになるのだ。

逆に言うと、戦争の口実を与えてしまえばガリアは身を守る術を持たない。

つまり、よつぽどの事がなければ戦争を起こそうなどという考えには至らないはずである。リッカが予想するところによれば、そのよつぽどの事というのが内通者の存在なのだろう。

「これは私の推測……いや、今の段階では憶測の域を出ないが……ゲルマニアもガリア、オストマルクとつながっている可能性がある。海では絶大な力を持つブリタニアの国力が弱まれば、ゲルマニアも海軍を整える事ができるからな」

レイは小さく唸ると、地図を睨んだ。

ゲルマニアがオストマルクと裏で協定を結んでいるというのは、説得力のある話だった。そもそも、オストマルクはガリアと国境を接していないし、ヘルベチアは中立的な立場を取っている。

ローマの存在が大きな鍵を握っている気がしてならないというのは、リッカも考えているようだが、今のところは情報が足りないようだ。

「話を戻すと、我々が追われていた理由というのは、ガリア側と接触したブリタニア貴族の情報を手に入れたからだ」

手に入れた経緯については全くの偶然だったらしい。亡命先で世話になったガリア貴族がご丁寧にも密約書を自室に放置していたのだ。

その情報を手にしてからすぐにブリタニアに向かったが、逆に情報を掴まれた事がバレてしまったという事だった。

レイは頭が悪いなと思ったものの、取り返しのつかない事になりそうだったので、口にはしなかった。

「あの追手達はガリアからの刺客——暗殺者と表現した方が分かりやすいか。とにかく、この情報を一刻も早くブリタニア側に届けなければならぬ」

「ニスカヴァーラ皇国は、デンマーク、ブリタニアと仲が良かった

の。だからこそ、お姉ちゃんはブリタニアを救ってあげたいのかもしれない」

と、マチルダ。

「ブリタニアには個人的な知人もいる。黙って見過ごす事だけではない」

「なるほど。つまり、実質的な味方はヒスパニアとデンマークだけって事になるのか」

レイが確認の意を込めてそう言うと、リツカは首を横に振った。

「いや、フランデレンもブリタニアの同盟国だから、戦争になればブリタニアの味方につく可能性は高い」

ただ、小国フランデレンはブリタニアのおかげで存在できているような弱い国なので、戦力としてはそれほど期待できないようだった。

「そして、三週間もすればブリタニアのウィングフィールド王家第一王女、キャロラインの生誕祭が開かれる。国が浮つき、警備も警戒も薄くなるこの日は、ガリアにとって絶好の機会だ」

表情が一層険しくなったリツカは、小さく、しかしはっきりと口にした。

「だからこそ、急がなくては」

2-1 密約（後書き）

新章です。

登場キャラが少ないので、キャラ紹介は書きません（希望があれば書きますが）。

しかし、登場する国名が多いので、地図を付けておきます。

挿絵にありますが、URLをここに貼っておきます。

<http://3867.mitemin.net/i30082/>

地球のヨーロッパの地図を用いていますが、厳密な設定を言うのであれば、地形などはやや異なっています。

しかし、そこまで設定に厳密な地図を用意するには技術が足りないので、代用で勘弁してください。

また、地図中の赤い線は国境のだいたいの目安です。

この地図は山脈や川的位置が判りづらかったので、ノートに書いたものをほとんど目算で移しています。

また、感想もお待ちしています。

第一章も終わって区切りがいいので、いかがでしょうか？ ↑あざとい（笑）

2-2 フラム宮殿

それから二日後の昼頃に、一行はブリタニアの首都ロンドンに到着した。

「ブリタニアは四つの王家があつて、その王家の中から一人がブリタニアの王として選ばれるの」

マチルダが得意気になつて話している。

三人はとある喫茶店でティータイムを楽しんでいるところだった。マチルダは先程衣服店で購入した赤を基調とする可愛い衣服に身を包んでいて、さっきから一生懸命にレイに向かって話かけている。

対するレイは表情こそ能面のように変わらないものの、声色から楽しんでいる様子が伝わってきた。

そして、その様子をリツカが眺めているという構図である。

ロンドンまで来れば王宮までは（少し遠いが）一直線で、人通りも多いのでリツカは気持ちを落ち着けることができていた。こうしてゆっくりしている時間も本来は無いと分かつてはいるのだが、マチルダがどうしても休みたいと言うので仕方なく紅茶を飲んでいるのである。

「しかし、ゆっくりするのも悪くないな」

と、リツカは誰にも聞こえぬように呟いた。

「今のブリタニア王はウィングフィールド王家のマーガレット一世。ロンドンを含む半島の南東部をウィングフィールド家が統治しているの」

「他の王家は？」

「南西部はウェールズ家、北はアーバイン家、アイルランド島はパイクス家。特にウェールズ家はブリタニアという国が成立してから存在する古い家系なんですって」

「詳しいんだね」

純粹に賞賛を送ったレイに向かって、マチルダはにっこりと笑う。
「うん。よくお姉ちゃんがブリタニアに行った時の話をしてくれたから」

レイとマチルダは無言でリツカを見つめた。

「あ、ああ……。四年……。いや、五年前だったかな。今のマチルダと同じくらいの時だったから……。私が十歳の時か」

発言を求められたリツカは、少々面食らいながらも、過去の事を思い出していった。

「ニスカヴァーラ皇国はブリタニアと親交があったから、私も五年前まではキャロ……。キャロライン王女の生誕祭に呼ばれたことがある。それ以降は色々と事情……。というか、連れて行って貰えなかったな」

リツカはそこで言葉を切った。

「それに、マチルダはブリタニアに来たことがないんだ。だから話にしか聞いていなかったブリタニアの国を見て嬉しいのだろう」
マチルダは、嬉しさを隠そうとしてもしていない。ここ数週間はずっと逃げ隠れてきたのだから、少しぐらいはしゃいでもバチは当たらないし許されるべきである。というのがリツカの密かな主張であった。

「それでね、ブリタニアにある王立図書館には沢山の本があるみたい。星の動きについて書かれたものや、禁断の魔術を使う方法について書かれた本もあるって聞いたの」

それからマチルダは魔術や魔法、錬金術について楽しげに語り始める。レイの故郷である大和にも似たような技術があると話すと、マチルダは興味深げに耳を傾けていた。

「それで、王宮まではどのくらいあるんだ？」

三人が紅茶を飲み終わってからしばらくして、レイは唐突に質問した。

「ここから東に向かって歩いてれば二時間くらいかな？ 途中、寄り道しそうなことを考えたら三時間はかかるかもしれない」

王女の生誕祭まで残り二十日。まだ余裕はあるが、対策は早めに打つに限る。そう考えるとおちおち時間を無駄にしてはいられない。というのがリツカとレイの共通する見解だったが、マチルダは事の深刻さが分かっていないのか、「今度はあっちに行きたい！」と姉を急かすのであった。

リツカはそれを考慮した上で三時間と言ったのだが、この分だと四時間くらいはかかりそうだ。レイはそう思ったものの、指摘するほどの事ではないと考えなおし、黙っていることにした。

「そろそろ出発するでしょう」

リツカは勢い良く立ち上がる。

そのとき、彼女の見事なポニーテールがマチルダの顔に当たった。直後、顔を抑えて大きくくしゃみをする少女。

レイは内側から奇妙な衝動が沸き上がってくるのを感じたが、それを表情に出すことはしなかった。



そこから西に九マイルほど離れた場所。

ロンドン中心部にあるウィングフィールド王家の住まうフラム宮殿。

窓の外から街を眺めて、小さく溜息を漏らす少女がいた。

宝石のように輝く翡翠色の瞳は焦点が定まっておらず、柔らかいウェーブのかかった栗色の髪をくるくると指で弄ぶばかりで、心ここにあらずといった表情をしていた。あるいは、魂が抜け落ちているようだと表現できる。

もうすぐ十六歳の誕生日を迎えるこの少女こそが、ウィンフィールド第一王女、キャロラインであった。

誕生日が来ることを好ましく思っていないのは、誰の目から見て

も明らかだった。

「ケティ」

彼女は、感情の無い声で側にいたメイドの名前を呼んだ。
普通の人であれば、というより注意していなければ聞き逃していたであろうその声に、ケティと呼ばれた女性は即座に反応した。それが彼女がメイドとして優秀であることの証明でもあり、キャロラインの専属メイドとなった理由でもあった。

「街に出たいと言うつもりであれば却下ですよ」

「どうしてかしら？」

「殿下の様子を見ていればわかりますよ」

キャロラインは今度は大きく息を吐く。そんなに分かりやすい顔をしていたのかと疑問を持ったが、すぐに思い直した。このメイドには隠し事など通用しないのだ。

「昼の間だけでもダメかしら？」

「ダメです」

ケティは即答する。取り付く島もなかった。

「まあ、いいわ。アフタヌーンティーの準備はできてますの？」

「いいえ。準備ができればお呼び出しがかかるでしょう」

「それなら、準備ができたら呼んで頂戴。私は少し横になるわ」

言い終わる前に横になってしまったキャロラインを見て、ケティはすうっと目を細めた。

この一見お淑やかなブリタニアの王女、もう少し付け足せば次期ブリタニア王最有力候補であるこの少女が、何か碌でも無い事を企んでいるということを、ケティは経験的に見ぬいていた。

だからと言って、『やってもいないこと』を咎める事など出来はしないし、何をしようとしているのか聞いたところで答えが返ってくるはずもない。いくら専属メイド（という名のお目付け役）であっても、ここは退室するしかなかった。

「……わかりました。時間になったらお呼び致します」

悔しい事に、これ以外の返答は、立場上有り得なかった。

「まさか、すぐに行動を起こすとは思いませんでした」
十分後、キャロラインを呼びに部屋に入ったケティは途方にくれて
眩いた。

部屋の中に人の姿はなく、カーテンが風に吹かれて波打っていた。

2-2 フラム宮殿（後書き）

いつもの事ながら、サブタイをどうするか迷いますね。
ちなみに、メイドさんは大好きです。

2-3 作戦会議

基本的に王宮の周りというのは鉄柵で囲まれて、部外者が安易に侵入できないようになっていた。特に、フラム宮殿はロンドンのほぼ中心に位置するために、人の行き来も激しく、入ってくる人間を見逃さない為に警備にも多くの人員が割かれている。

得体の知らない少年少女三人が急に王宮に入れると騒いでいても、入れてくれる訳がない。

予測されて当然の結果だったのだが、リツカとマチルダはロンドンに着いたことで気持ちが楽観的になっていたのである。

「せめて、貴族であると証明できれば良かったのだが……」

リツカがライティネン家から持ってきた唯一のものであるサファイアのネックレスは、一市民では到底手にすることができない高価なものであったが、それが貴族としての証明にはならなかった。

逆に、スリカ盗賊か――いずれにしても胡散臭いものを見る目を番兵に向けられたのは間違いない。

そんなこともあって、リツカとマチルダの気分は沈みきっていた。レイは、いつもと大して変わらなかったが。

「強行突破するしかないってことか？」

「できれば避けた方法だが、それしか無いだろうな」

正直、犯罪行為をする事に対して、リツカには未だに抵抗があった。だが、この緊急事態では仕方がないだろう。

「でも、宮殿に侵入したところで、情報はどう伝えるの？」

マチルダはもう少し先の事を心配していた。

「リツカが言ってただろう。個人的な知り合いがいると」

結論から言えば、その心配は不要だ。

それよりも、二日前にさりげなく言っただけの事柄を覚えていた事に、リツカは少なからず驚いた。どうやら、この異国の少年は戦闘能力だけでなく、記憶力も知能も高いらしい。知識は無かった事

は言うまでもないが。

リツカはレイに対する評価を上方修正する必要性を感じた。

「ああ、その点については心配ない。」

ただ、王宮の内部構造が分からないから、それに詳しい人物か、あるいは図面が要るな。もちろん、王宮の図面なんていうのは存在しないから、それに詳しい人物から聞き出すしかない」

「そんなものは中に入ってから誰かを捕まえればいいだろう」

「……それは気づかなかった」

リツカの気分は再び沈んだ。下限は存在しなかったらしい。

そんな姉を、一生懸命に励ますマチルダがとても可愛らしかったので、しばらくの間、レイは二人を観察していた。

そして、突然リツカが大声を張り上げた。

「とにかくだ！」

マチルダに励まされて気持ちが高ぶってきたらしい。すぐに落ち込む傾向があるが、復活も早いようだった。

「作戦を練る必要がある！」

「必要か？」

「当然だろう。できるだけ人目に触れないようにしたい」

「だとすれば、実行は夜ね」

「そうだ。幸いにも、今夜は月がない」

夜の明かりはあっても民家や宮殿の窓から漏れる蠟燭ろうそくの火くらいのもので、まず、何も見えない。目が慣れてきても、十フィート先すら見えないのだ。

その事もあって、夜の間は見張りが増員される。当然だが、それでも昼に侵入するよりはずっとマシだ。

「レイには見張りの無力化をお願いしたい」

「具体的に、どうすればいいんだ？」

「第一に殺さないことだ。気絶させる程度で十分だ」

「随分と難しい要求をしてくるな……。視界ゼロで殺さずに気絶させるとはね。普通に殺す方がずっと簡単だ」

挑発的な言い方に、リツカは口の端を歪めた。

少し前に気づいた事だが、レイは表情を変えないのではなく、変えられないのだ。そもそも、表情で意思を伝達するという発想が彼にはない。

その証拠に、彼の声にはしっかりと感情が含まれている。慣れていないと、表情と声のギャップに違和感を覚えてしまうが、もう慣れた。

彼は、随分と楽しんでいるようだった。

「できないのか？」

だからこそ、リツカも挑発するように言った。

「そんな事はない。殺すより面倒なだけだ」

リツカはこの時、人の命を何とも思っていない（ように見える）彼の倫理観がどのようなになっているのか、問い詰めたいと心底思った。

殺さなくて良かったという訳ではなく、難しい事に挑戦することに楽しみを見出しているのだ。

長い間、師と二人だけで暮らしてきたということは聞いていたのだ、普通の人と同じ感覚を持てという方が無理だ、ということは分かっていた事ではある。

単に、彼の中の優先順位が知りたかったただけだ。

もしかしたら、人より犬や狼を大事にしているのではなからうか。
「あー……、いや、そうか」

しかし、それを追及するのは止めておいた。

リツカはわざとらしい咳払いをして、話を続ける。

「中に侵入できたら、誰かを捕まえて王女の居場所を吐かせる。これでもいいかな？」

「王女？」

マチルダはオウム返しに聞き返す。

「そうだ。言ってなかったか？」

リツカは自身の記憶を辿るように視線を上に向けた。

「私の個人的な知り合っているのは、キャロライン王女の事なのだが」

2-4 キャロラインの憂鬱

一方時を同じくして――

「……誰も見てませんわね」

人がいないことを確認して、歪んだ鉄柵から体を出したのはウィングフィールド王家の第一王女キャロラインである。

「この出入口も狭くなってきましたか……」

昔は簡単に出入りできたこの秘密の場所も、体の成長と共に通り抜けるが困難になっていた。これで胸が成長すると、つかえて動けなくなるかもしれない。

「成長する兆しが見えない、というのも問題ではありますが……」

キャロラインは自分の胸を見つめた。全くのゼロという訳では無いが、同年代のメイドより胸が無かったし、二人いる妹達よりも小さい。そして何より、一年ほど前から、胸の大きさが変わっていない気がする。

キャロラインは軽く咳払いをひとつすると、服に着いた土埃を払い落とした。

「役に立っていますし、良しとしましょう」

見張りの多くない昼間は宮殿を抜け出すのにそれほど労力が必要としない。その代わり、過去城を出た時において、誰にも見つからずに戻れたのはたったの一回だ。今回城を抜け出した事は、メイドのケティがすぐに気づくだろう。

「誰にも報告しない……という期待は持てませんか」

脱走したのは今回が初めてではない。むしろ、あまりにも脱走するので、月に二回は護衛付きで街に出かけているくらいなのである。かと言って、無断外出した時にケティが見て見ぬふりをするという事は考えられない。

ところで、今月はまだ一回も外出許可が降りていない。先月も市

街を見てまわれたのは一回だけだった。

それが意味するところは、近衛兵や騎士団の人間が自分を探しに街に降りてくる、という事である。今までも何度かあった事だが、ここ数ヶ月は特に治安が悪いと言われているので、人員が今までより多く割かれるかもしれない。

つまり、自由に動けないのだ。

街に出て買い物を楽しむ事が目的なのに、監視の目を気にしなければならぬ。楽しむ事よりも警戒心あるいは恐怖心の方が優るだろう。

ただし、彼女にはそれを考慮してでも街へ出て買い物を楽しみたかったのだ。

要するに、鬱憤が溜まっていたのである。

「私の誕生日祝いなんて、本当にふざけてるわ」

生誕祭なんていうのは名ばかりのもので、実際には国内貴族と外国貴族の交流会――すなわち、外交パーティーである。

十歳の時に社交界デビューを果たしたキャロラインだが、自分の誕生日記念日が何か汚らしいものに使われている気がして、どうしても好きになれないでいた。

もうすぐ十五になる身であり、結婚も真剣に考えなければならぬ。

ウィングフィールド王家の頭首はブリタニアでは唯一女性をトップに据える慣習がある。ウィングフィールド王家の次期頭首が約束され、かつ次期ブリタニア王最有力候補でもあるキャロラインは嫁ぐ必要は無いが、婿を貰う可能性は限りなく高い。

現ブリタニア王マーガレット一世と違い、独身を貫く事も難しいだろう。何しろ、彼女の場合でも国内はもちろん、ヨーロッパ諸国からも大きな反対があったのだ。さすがに二者連続でウィングフィールド頭首が独身というのは、非常に難しいだろう。

彼女は小さく肩を落とす。

「ま、それは今考える事ではありませんわね」

と、キャロラインは一人呟く。独り言は、昔から治らない彼女のクセだった。

彼女は綺麗な栗色の髪をクシャクシャと手でかき回し、両側をゴムで乱雑に縛り上げる。

服については先月に街で買ったお気に入りのものだ。特に深い青色のマントは軽くて丈夫、デザインもシンプルなので、次に街に出る時は身につけようと思っていたものである。

「ふふっ。これはとっても素敵ですわ！」

自分の格好を確かめるようにくると一回転すると、市場へ向けて悠々と歩き出した。

どこぞの王女には全く見えない。むしろ、都会に憧れて都会人の真似をする田舎娘という表現がぴったり合っている。優雅とは言えないが、可愛い格好だとキャロライン自身は思っていた。

キャロラインが向かった先は宮殿の東側。最も人通りの多い場所である。

ここは外国からの輸入品がより多く集まり、珍しい品物もたまにあつたりする。

ちなみに、今回の資金はダカット金貨四枚にドネーク銀貨三十枚。正直言って重い。はつきり言って、スリなんか狙われたら結構な痛手である。

そういう意味で護衛がないというのは不安だったりするが、今回ばかりは仕方ないだろう。

「まずはお腹が空いたので、何か食べるものを買きましょう」

ブリタニアの食文化は隣国ガリアよりも十歩遅れていると言われているが、決して、そんな事はない。

確かに『貴族が食べる』食事に関して言えばそうかもしれないが、中流階級以下の身分の人間が食べる物の質はそれほど変わらない。というより、優っているのではないだろうか。

ブリタニアは殆どの他国とは違い、憲法を持っている。

特権階級の権限はかなり制限されていて国民の権限は意外と強く、ガリアなんかと比べると平民はとても裕福なのである。

こういった市場に出回っている商品でも十分に味が良いのは、その結果であろう。

少なくとも、キャロラインはそう思っているし、それが誇りでもある。

「不思議な味……」

だが、イチジクのジュースは失敗だったかもしれない。

十分にお腹を満たした後に呉服店に入り、幾つか服を買った。

キャロラインは青系統の色が大好きだったので、買った服達は見事なまでに青ばかり（と言っても青緑色から紫まで、それなりに種類はあった）。

ただし、その服はフリルが着いたものや、動物の毛皮を使ってアクセントを出している物など、キャロラインの好みにはあまり合わないものだ。

とにかく派手なものが流行している昨今である。流行色とは言い難い青だが無いという事はない。

しかし、さすがにデザインまでシンプルなものは存在していなかった。

「まあ、妥協は必要ですわよね」

買い物自体は楽しかったし、商品の内容にも不満はあるがそう悪いものでもない。

そして意気揚々と店を出たところで、キャロラインは街の異変に気がついた。

2-4 キャロラインの憂鬱（後書き）

投稿遅れました。

どうしても出来が悪くて三回ほど書き直ししましたが、これもあまり納得がいかないので、書きなおすかもしれません。

2-5 視線の先に

「――やけに物騒だな」

リツカが顔を顰めた。

「そうかな？」

マチルダは気がついていないが、午前中に比べて明らかに空気が違う。よく観察をすると、武装している人間が多い事に気がつく。その張り詰めた空気の中から、焦りや不安といった感情をリツカは鋭敏に感じ取っていた。

現在、リツカ達三人はロンドンの大通りを散策していた。

作戦開始時間まで、店を見て回りたいというマチルダの発案である。そこからは緊張感というものが欠けていて、リツカは不安に思わざるを得なかった。

元々、作戦にマチルダを連れて行く予定では無かったのに、「わたしも行きたい」とマチルダが駄々をこねたのだ。

最後の最後で『王宮に侵入』という大きなイベントをお預けにされたくないというマチルダの気持ちは、よく考えてみたら当然の事なのだが、リツカとしては命の危険がある場所にマチルダを連れて行きたくないのである。

そして、この状況だ。

「確かに、午前よりは空気が痛いな」

レイは曖昧な表現で返したが、言いたい事はマチルダにも分かった。何が原因かは分からないが、軍がロンドン市街の警戒を強めたという事だ。言い換えれば、今夜予定している王宮潜入作戦も実行し難くなっている。

「その空気が重いつていうのはよく分からないのだけど、夜に備えて対策をした方がいいと思うよ」

「それは無理だ。元々策なんて無いようなものだったからな」

「それはそうだけど……」

「マチルダの言う通り、不確定要素は少しでも排除しておくに限るのでは？」

「うーん……」

リツカはしばらく考え込む。こういう時、リツカは自分の髪の毛を弄ぶ。いいアイデアが出ない時は、髪の毛を引っ張って頭に刺激を与えるらしい。

その所為で髪の毛が数本まとめて引き抜かれる事があるが、今回は髪の毛を抜く必要は無かったようだった。

「この警戒の原因が分かればいいが、調べる手段が無い。夜に備えて鋭気を養うのが一番だろう」

「お姉ちゃんがそう言うなら……、それでもいいけど」

「原因が分からない以上、ここにいるのは危険だな。宿に戻ろう。ここでは私達は他所者だからな」

「わかった」

マチルダは頷いて、リツカの手を握る。

「でも、一体何が起こったんだろう？」

時間が経つにつれて、空気がピリピリとしてきている。たぶん、マチルダには分からないだろうが、これは最早『異常事態』だ。原因の追求はしないと決めたリツカだったが、自分の決定に自信が持てなくなっていた。

それでも、弱みを見せる訳にはいかない。妹の前という事もあったが、それ以上にリツカは意地っ張りだった。

「さあ？」

「心当たりもないの？」

「もしかして、私達がロンドンにいる事にガリアが気がついたとか……？」

「お、お姉ちゃん……」

「え、あ……いや、冗談だ」

「止めてよお」

リツカは、上目遣いで見つめてくるマチルダに対して苦笑する。こういう事を平気でやってくる（計算しているかどうかはこの際別としても）妹の将来はある意味安泰だろうと、彼女はそんな事を考えていた。

しかし、そのおかげでリツカはひとつ見逃していた。

「ところで、レイさんは何処にいったの？」

「あれ？」



「はぐれたかな？」

レイは顎に手を当てて考える。人通りが多く、交差点も多いこの街で一度はぐれたらもう一度見つけ出すのは難しい。一応こういう時の為の集合場所は宿という事になっているが、ここからだと少しばかり遠かった。

「空気が痛い」

何が起こっているのかは分からないが、早めに合流した方が良さそうではある。ただし、探した方が早くなるか、宿に戻った方が早くなるのか、その微妙なラインの上でレイは迷っていた。

もっとも、迷う時間はあまり無かった。迷っている時間が勿体無いという意味ではなく、別の事に関心が移ったからである。

「なんだあれ？」

ふと横を見ると、木箱の中から少女が出てきた。青いマントをしたその少女は、青いマントから土埃を払い落とす。舞い上がった土埃によって、少女は咳き込んでいた。

レイはその様子をじっと見つめていた。その意味不明な行動がなかなか愉快だった所為であるし、なんとなく興味を持ってしまったのである。

レイがずっと見ている事に気がついたのか、その少女はレイの方

を見た。彼女は何故かカッと顔を赤くしたが、すぐに冷静さを取り戻し、ひとつ咳払いをした。

「そこのあなた！」

誰に言われたのかは明らかだったので、レイは後ろを振り返る事はしなかった。だが、話しかけられる理由がさっぱり思い浮かばない。どういう状況になれば人から話しかけられるのかをレイはよく知らないのだが、見てるだけで声をかけられる事案というのはレイでなくても知らないだろう。

「何だ？」

面倒事に巻き込まれたと、レイは心の中で溜息をついた。リツカ達と合流する必要があったというのはもちろんだが、感情をむき出しにしてくるようなこの手の人間は、レイが苦手とする部類のものだ。

「この辺の人間ではないでしょう？ どこから来たの？」

「大和」

「……ヤマト？ あの東の果てにあるっていう、伝説の国？」

「伝説じゃないよ」

「伝説じゃない！ ヤマトは何でも黄金でできているのでしょうか？ 彼女はとても興奮している様子だった。

「そんな事はない。全部、木と紙からできている」

レイは大和には住んでいたものの、その大半を山の中で過ごしてきた為に、大和の実情は良く知らない。しかし、大和の旧都である平城というところには一度足を踏み入れた事がある。その圧倒的な人の多さと芸術的な建築物に目を奪われてしまった記憶は脳の中に鮮明に残っていた。

「木と紙？ 火事が起こったら？」

「さあ？」

そんな事までは知らない。

「じゃあ、世界の果てが見えるっていうのは本当かしら？」

「世界の果て？」

「ええ。海の水が落ちて行く滝の事よ」

「は？」

「世界の端から海の水が流れていくのでしょうか？」

そんな場所がある訳がない。もしかすると、この少女は世界が平らだと思っているのだろう、とレイは推測する。だとすれば、そういった考えにも行き着くのもかもしれない。しかし、この国では世界は平らだと考えられているのだろうか。

「世界は平らじゃない。丸いんだ」

「何デタラメ言っているのよ。世界が丸いなんて習わなかったわ」

「世界は丸いのは本当だよ。ここからずっと東に行けばいつかは同じ場所に帰ってくる」

「バカにするのもいい加減にしない！」

「バカにしているつもりは無いのだが……」

世界が丸いという事実は、証明しろと言われてもすぐに証明出来る訳ではないし、納得させる事も難しいものだ。

「それで、何の用なんだ？」

レイは強引に話の流れを元に戻す。こうでもしないと永遠に話が続きそうな気がしたからだ。

「あ……えっと……」

毒気を抜かれたようにきょとんとした少女は、言おうとしていた事を思い出したようにハツとなった。そして声を張り上げる。

「それは、もちろん木箱の中に……あっ……」

次第に尻すぼみになっていく言葉。少女はレイではなく、更にその後ろを見ていた。

「ん？」

レイが振り返る。何人かの人間が、こちらを怪訝そうに眺めた。

「いたぞ！」

そして、そのうちの一人がそう叫んだ瞬間、にわかに緊張が走る。それは次々と伝播していくのをレイは感じた。

「ありゃ何だ？」

「走って！」

少女はレイの問いには答えなかった。レイに背を向けて走りだす。同時に彼らもこちら側に向かって走りだした。

少しの間どう行動するか困っていたレイは、彼女の後を追うことに決めた。やっぱり、放っておくのは後味が悪かったのだ。

そして、数日前にも似たような状況があったと思い返していた。ただし、今度は追われる側だった。

2-5 視線の先に（後書き）

予定より一週間遅れでの投稿。

週一ペースは結構厳しいものがありますね。

次回は戦闘の予定。

戦闘シーンは心理描写が少なくていいので楽ですよ！
上手く書けるかどうかは別として……

2-6 翻弄

「一体、アイツらは何なんだ？」

走りながらレイは尋ねる。二人は宮殿からどんどん遠ざかっていった。

「え、えーっと……こっちよ！」

話している暇は無いとばかりに方向転換するその少女は、すぐに息切れを起こし始めていた。レイは汗すらかかないような距離であるにも関わらずだ。

「体力無いんだな」

「余計なお世話。とにかく、アイツらに、捕まりたくないわ」

事実をありのままに指摘したレイに対して、その少女は言葉の端々で息継ぎをしながらも、軽く受け流すように言った。

「へえ？」

理由は分からないが、この少女にもどうやら追われるだけの理由があるらしかった。彼にとって最大の問題は、追う側が正義なのか、それとも追われる側が正義なのかということである。以前は自分の金を失う原因になった為に、（レイにとっての）正義は自分側にあった。その代償が命というのは一般常識に照らし合わせると重すぎると思われるが、彼には彼なりの正義があるのである。

そして、目の前を一生懸命に走っている少女に理由を求めても、満足に答えが返ってくるとは到底思えない。そんな時間など無いし、走りながら喋るといふのは相当負荷がかかるのである。

レイはひとつだけ、質問をぶつけてみる事にした。

「追ってくるアイツらは殺してもいいのか？」

ビクリと少女は動きを止めた。それに合わせてレイも動きを止める。

「どうした？」

振り返りながらレイを睨みつける視線に、彼は一瞬たじろぐ。明

らかに自分より弱い存在に対して、これ程までに威圧感を感じた（恐怖という感情とは少し違うだろう）のは初めてだ。

「それは本気で言っているのですか？」

言葉そのものは穏やかだったが、すうつと目が細くなるのを見て、レイは彼女が怒っているらしいことを悟る。人の感情を読むことが苦手な彼でも、分かりやすいと感じる程に彼女は自分の気持ちに素直だった。

「いや、確認したかっただけだ。殺す必要がないならそれでいい」

人を殺す事に対して罪の意識を持たないレイだが、別に殺す事が好きな訳ではないし、特に必要性を感じなければ人を殺すことはしない。殺すなとリツカに口酸っぱく言われていたし、人を殺せば敵を作る事は彼にも十二分にわかっているからだ。

「それはどういう意味？」

訝しげに問いかけるその少女に対して、レイは何も答えなかった。その代わりに背中から二本の刀を取り出すと、それを彼女の手に押し付ける。

殺すことを拒んでいるという時点で、少なくとも《……》

彼女が悪では無い。どちらが正義か分からずとも、話し合いの余地が成立しているならば、会話させる事がベストな選択肢なのだろう。そう考えた上で、レイは軽く肩をほぐし、少女の翡翠色の瞳を見つめた。

「そういえば、君の名前は？」

「キャロラインよ。キャロって呼んでくれて構わないわ」

当然、レイはその名前に聞き覚えがあった。が、その名前に反応するのは得策ではないと判断した。レイが思い浮かべた人物と同一である可能性もあるし、仮に思った通りの人物だったとすると、相手の方が平静でいられないだろう。

思考は一瞬だった。

「そうか、俺はレイだ。よろしく」

気づかないふりをする事に決めて、レイは軽く挨拶をするに留め

る。

「よろしく?」

なぜ、今すぐ逃げきらなければいけない状況で呑気に挨拶などしなければならぬのか。そう思った彼女は軽く首を傾げる。その所為で最後の挨拶が疑問形になってしまっていた。

「そして、これは……?」

レイから渡された長い得物が二つ。それが剣、あるいはそれに類する武器であることは簡単に推測ができたが、どうして今、このタイミングで武器を手放すのか、キャロラインには少しも理解できない。

「それは動くのに邪魔だからね」

レイは武器そのものを「邪魔」と言い切った。

「?」

頭上にクエスチョンマークを浮かべて混乱しかけている彼女を余所に、レイは集中力を最大限まで高めていく。

「八人……いや、十人か」

視界には一人も入ってきていないが、音や空気の流れ、気配から人数を割り出す。幸いにも挟み撃ちはされていないようだったが、これはレイにとっても数が多い。正面からぶつかったならば、まず勝ち目は無いと言えるだろう。

「何をする気なの?」

「何って……とりあえず、相手の動きを封じるって事になるんだろうな」

まるで独り言のようにレイは呟く。そこには、焦りの色が全くない。未来における決定事項としてというのは言い過ぎにしても、それが苦もなく可能だと考えているのだとキャロラインは理解した。

それは、自惚れ過ぎだ。そう、思った。

「でも、相手は相当手強いわよ」

「そうだね。でも、何とかなるだろうさ。君はここに隠れているといい」

通路の影になっている部分にキャロラインを押し込める。女性にしては背が高いキャロラインの体を完全に隠す事はできないが、目立つような事はなくなった。

そして、直線の向こう側に最初の追手の姿を二人は確認した——次の瞬間にはキャロラインの視界から、隣にいたはずのレイが消えた。

キャロラインが気づいた時には、レイは百フィート以上も離れていた。彼は、壁を足場にして、狭い通路の中を左右に、まるで飛ぶように進んでいく。

「……すごい」

と、キャロラインが感嘆を漏らすのと、レイが最初の追手を襲撃したのはほぼ同時だった。

「うグッ」

上空から攻撃を仕掛けられ、首を捻られた男は一瞬で意識を手放した。それと同時に、流れるように着地したレイは、視界の中に六人の男を捉える。

突如として眼前に現れた黒髪の少年を呆然として見つめていた彼らは、二人目が倒れると同時に我に帰った。

そこからの反応はお互いに素早かった。

レイは三人目に向かって走りだすも、即座に引きぬかれた剣を避けるために急ブレーキをかける。そのままクルリと体を回すと、その男の右側に控えていた一際大きな男に向かった。

丈夫そうな革のベストを纏っていたが、レイが相手の場合は気休めにすらならない。そもそも、彼は武器を持っていないのである。素手による打撃程度では数発まともに入れたからといって、訓練を受けた大の男がやられるはずもない。

それでも、彼は武器を使わない戦闘スタイルの方が得意だった。彼が刀を使っていたのは、あくまでも殺傷能力が高い武器だからであって、人間を殺すことを禁じられた——正確には、殺さずに相手を無力化する戦闘を強いられている彼には、刀というのは本当に

重荷意外の何物でもない。

では、何をもって敵を制するのか。

それは偏に、彼が人体を知り尽くしているだけのことだ。

的確に敵の急所を打つ――更に言うと、神経を直接攻撃する事で一撃で相手を昏倒させる技術は、古来より大和に伝わる戦闘技法の一種であり、手先が器用な彼向きの戦闘スタイルとも言える。その性質上、殺傷力は低いが、一対一の戦いであれば相手を戦闘不能にしてからゆつくりと料理すればいいだけの事で、何の問題もない。集団戦であれば、殺しておかなければ不安要素が増える事は間違いないが、一度喰らえば三分は回復することは無いだろう。

そして、レイにとってその時間は十分すぎた。

この瞬間も、大男が振り下ろした剣を最小限の動きだけでかわしきり、隙だらけの懷に潜り込む。そして、脇の下にある神経が集まる場所に、軽く拳を叩き入れた。レイが彼に与えた衝撃は、神経を通って脳までに達し、その大きさに脳がオーバーヒートを起こす。

ただの一撃で、その男の意識は刈り取られ、その場にひれ伏した。その受け入れ難い事実を目の当たりにして、追手の男たちに動揺が走る。

完全にパニックを起こした残りの四人は、一斉にレイに向かって突進した。

だが、そのような感情任せで統率の取れていない攻撃など、レイで無くとも、少し腕のたつ者であれば、あしろう事は簡単だ。難なく攻撃を躲されて、男たちの動揺は激昂に変わる。それでも、彼を捉える事は叶わない。縦横無尽に動きまわるレイの動きに、彼らは翻弄され、ひとり、また一人と意識を落としていった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0912v/>

東からの来訪者

2011年11月13日22時00分発行